

## 【視察調査報告書】

会 派 名	立憲民主・市民の会
参 加 議 員	【議員】 5名 安藤 修三、小林 裕恵、森 喜彦、濱野 正太、九鬼 ともみ
日 程	令和 5年(2023年)7月19日(水)～7月21日(金)
詳 細	
視察日及び視察先	7月19日(水) 北海道 登別市
視 察 内 容	登別グリーンスローモビリティ(環境配慮型低速電動バス) 「オニスロ」について
概 要	<p>登別市は北海道南西部、支笏洞爺国立公園内に位置し9つの泉質を保有する温泉はインバウンドのみならず、道外および道内において安定かつ根強い人気を誇っている。しかし、駐車場不足、高付加価値層向け宿泊施設も不足するなど多様化する観光客のニーズへの受け入れ環境整備が課題である。本年4月、アフターコロナの観光客誘致の起爆剤として登別グリーンスローモビリティ(以下グリスロと略)「オニスロ」の運行が開始された。</p> <p>低速電動バス導入による効果や課題を調査し、本市における公共交通問題の参考にするために登別温泉街の視察を行った。</p> <p>登別温泉の地域活性化を目的とするグリスロの定期運行に至るまでには、車両購入財源にデジタル田園都市国家構想推進交付金と新型コロナウイルス感染症対欧地方創生臨時交付金を用い、2021年秋の実証運行を経て、検討開始から4年後の今年に本格始動を迎えた。オニスロという愛称は、登別温泉の観光シンボルである鬼にちなんでいる。乗車料金は一回200円、一日券は500円で発着場以外でも、自由に乗り降りができる。</p> <p>グリスロ車両は市が購入し、運行主体を一般社団法人登別国際観光コンベンション協会が担い、運行管理を道南バス株式会社に委託している。</p> <p>運行ダイヤは、ターミナルから出発し戻ってくるまで20分の行程を土日祝日は9時から、平日は14時から30分ごとに行っており、2車両を15分ずらして運行している。毎週火曜日を運休日とすることにより経費を削減している。</p> <p>グリスロ乗車料金の支払い方法は①チケット販売(温泉バスターミナルまたは車内にて)、②車内でのQRコード決済の二通りがあり、平均乗車人数の目標100人/日に対し、運行開始から2か月間の利用状況は平均乗車人数47人/日。目標を達成するために、①登別市が目指す地域脱炭素やSDGs推進理念や乗車方法の周知、②ホテルや飲食店・土産店で乗車券を販売することにより旅マエに乗車したいという気運を高めておく工夫 ③旅行会社やOTA(Online Travel Agent)・ホテル商品との連携、④登別温泉街のイメージキャラクターの同乗やイベントでの利用することにより認知の拡大を図る などを考えている。</p>

所 感 等

(意見・課題・  
本市への反映など)

登別市観光コンベンション協会による説明後、実際にオニスロに乗車した。「手をあげれば乗れる」ということで、道路脇でオニスロが来るのを待つ。やがて低速で走る青い車両が見えてきた。低い車体の下には小さなタイヤが並び、ユーモラスでさえある。我々を歓迎し赤鬼に扮装した市の職員の方が乗車してくださっていて、他の乗客や歩道を歩く観光客に愛嬌を振りまいていた。そのコントラストは鮮やかで、見ている人の気持ちを楽しくさせる効果がある。

当日は晴れており、雨除けの覆いなしの走行であったため、風が心地よく、道行く観光客との距離も近く感じた。一日乗車券を購入して、「天然足湯」と「地獄谷入り口」の二カ所で降り観光スポットを訪れてみたが、オニスロに乗ること自体が楽しく感じられたので乗車時間もただの移動時間ではなく他の観光客とのつかの間の交流を楽しめる、非常に濃厚な観光体験となった。地元の人と観光客、または観光客同士の会話を生む装置になると実感した。とはいえ、他の客が実際に手をあげてオニスロに乗り込む場面に遭遇することはなかった。一回乗り込むごとに 200 円(一日券は 500 円)という料金は家族連れにとっては高く感じるのかもしれない。

公共交通の問題を解決するためには、やはり経費の問題が大きいと感じた。登別市では観光 DX を推進するという一方で、デジタルサイネージでの情報発信と将来のオニスロの自動運転を視野に入れて、「みちびき(準天頂衛星システム)」を利用した車両の位置情報サービスを利用することを計画している。カーボンニュートラルの推進など、グリーントランスフォーメーションの実現に向けた多様なコンテンツの実相を掲げることで、補助金、交付金を獲得することができたという話は参考になった

持続可能な運行体制を整えるために、運行ルートや運行ダイヤなどについてアンケートや交通量調査などを行ったうえで実証運行を行い数年かけて体系をまとめていったという登別市での実践は、八王子市の公共交通課題に対しても大変参考になると感じた。

視察の様子



登別グリーンスローモビリティ「オニスロ」



「オニスロ」に乗って、足湯まで

視察日及び視察先	7月20日(木) 北海道 札幌市
視察内容	放課後の居場所づくりについて
概要	<p>札幌市には199館の児童会館があり、地域全体に均等に設置されている。これらの運営は公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会(SYAA)に一括して委託されている。SYAAは1980年に札幌市の出資で設立され、青少年の健全育成と社会参加促進を目的に、多岐にわたる活動を行っている。これにはキャンプやレクリエーション、文化活動、社会教育の推進、市民活動の振興が含まれる。設立当初は15名の職員と1か所の施設からスタートし、1999年には札幌市の児童会館全館の管理運営を受託した。現在では職員数2000名、施設数200カ所を超え、2013年には公益財団法人へ移行している。</p> <p>児童会館は0歳から18歳の子どもたちを対象とし、利用時間は8:45から18:00までである。週に2回は中高生専用の「ふりーたいむ」を設けており、中学生は19:00まで、高校生は21:00まで利用できる。ミニ児童館の対象者は地域内の小学生で、放課後から18:00まで(学校休業日は8:45~18:00)利用可能である。放課後留守家庭の小学生のための児童クラブもあり、利用時間は下校後から19時まで(8:00~8:45 および 18:00~19:00の利用は有料)である。</p> <p>そのほか児童会館では0歳から就学前の乳幼児と保護者のための「子育てサロン」や、18:15から21:00までの有料の地域貸し出しサービスを提供している。一日の流れは、午前の「子育てサロン」から始まり、午後は自由来館と児童クラブの子どもたちを受け入れる。夜間は中高生のための「ふりーたいむ」を開催している。また、子ども運営委員会を設置し、年中行事やイベントの企画・運営、ルール作りを行っており、地域連絡協議会を通じて地域の意見を取り入れ、子ども中心の街づくりに励んでいる。</p> <p>「二条はるにれ児童会館」は札幌市立二条小学校に併設されており、児童会館のみならず、まちづくりセンターや地区会館などの複合施設となっている。これは市内初の取り組みであり、地域コミュニティの中核施設としての役割を果たしている。</p>
所感等 (意見・課題・本市への反映など)	<p>札幌市立二条小学校は市電「西15丁目」駅近くに位置し、児童館、小学校、まちづくりセンター、地域会館が一体化した複合施設となっている。児童会館は、本を読む静かな部屋、ゲームや会話ができるプレイルーム、自由に過ごせる部屋の3つに分かれ、乳幼児用のおもちゃや家庭用の棚も設置されている。平日の平均来館者は147名、児童クラブ登録数は195名で、職員は15名(常勤4名、パート11名)である。児童館と小学校は図書室、体育館、グラウンドを共有し、昇降口から外に出て入館するシステムが採用されている。放課後、子どもたちは紙の用紙に名前を記入するか、専用のタグを読み取り機にかざして入館する。職員用の端末により出席状況が即時に把握され、効率化が図られている。</p> <p>児童クラブの児童にはおやつを提供せず、自由来館の子どもたちと分ける必要</p>

がない。児童館は多くの子どもたちで賑わい、絵を描いたり、宿題をしたり、カードゲームをするなど、自由に過ごしていた。職員と子どもたちの間には穏やかで伸び伸びとした雰囲気があり、子どもたちの人格を尊重し、大人たちが寄り添う方針が実践されていることが感じられた。

二条はるにれ児童館は複合施設の一部として、地域の人々の生活に密接に関わっている。地域住民が児童館や図書室を利用し、まちづくりセンターで作業や会議を行っている様子を目の当たりにした。職員は地域住民の対応に慣れており、地域で子どもや若者、保護者を見守る理念が浸透していることが明らかであった。地域の人々との日常的な触れ合いが、地域愛着を育むことに寄与していると感じた。多世代、多様な背景を持つ人々との日常的な交流が可能な複合施設の有用性は、今後の八王子市のまちづくりにおいて大いに参考になると感じた視察であった。

### 視察の様子



(左)二条はるにれ児童館入口  
(右)小学校入口

正門から入ってくると、  
まず目に入ってくる掲示

### 学校に併設されている二条はるにれ児童館



プレイルーム内 児童クラブ  
利用家庭保護者から預か  
った替えの下着など保管す  
る棚



児童館入口に設置された出  
席管理システム  
オレンジの読み取り機にタ  
グをかざすと PC で名前を確  
認することができる



地涌来館用 受付用紙  
児童館に遊びに来た子は紙  
の用紙に名前を書く

視察日及び視察先	7月20日(木) 北海道 札幌市
視察内容	町会・自治会のDX化(町内会の電子回覧板導入)について
概要	<p>札幌市は北海道・石狩平野の南西部に位置し、昨年、市制100周年を迎えた。人口197万人、面積1,121K㎡という全国市町村で4番目の人口規模を持ち市域は10区に分かれており、町内会は2,200弱、連合町内会は約20団体ある。近年、多様化する生活様式や少子高齢化、コロナ禍による活動の停滞などにより町内会への加入率が低下し、担い手不足により市民生活が脅かされている。というのも、例えば冬季の除雪、排雪は行政だけでは対応しきれないが、地域住民の高齢化、都市化による住民同士の関係希薄により、支え合う気運の低下が著しい。地域自治立て直しのためにも、町内会の加入率をあげる努力が求められている。そこで町内会加入へのハードルを下げ、役員の負担軽減と町内会活動の見える化を目的として、町内会活動のデジタル化支援事業を実施することにした。</p> <p>札幌市では、従来、町内会・自治会における情報伝達は回覧板を人から人へ手渡しで渡す手法が主流で、それは地域での交流や見守りの一端でもあったが、共働き家庭の増加に伴い、全戸回るのに1か月～1か月半かかってしまったり、一方、回すことを優先して熟読しないまま次のお宅へ渡してしまうなどの問題もあった。スマートフォンなどの情報通信機器は徐々に浸透しているが、都市化が進み比較的若い世代が多い地区ではSNSなどを連絡ツールとして使いこなしている一方、デジタル化はなかなか進まない町内も少なくなかったため、町内会活動のデジタル化を支援することになった。2021年度(令和3年)に、Zoomの使用方法をメインとした実践的研修会と電子回覧板(各区一つの町内会に対し、10回程度の支援を行う)モデル事業を、そして2022年度からはさらに町内会デジタル活用促進補助金を開始した。</p>
所感等  (意見・課題・本市への反映など)	<p>ここ札幌でも、高齢者世代と若い世代では、働き方や社会のあり方が大きく違うため、暮らし方・意識にもギャップがある。しかし、雪かきを地域で行う必要上、自治会・町会という住民同士のつながりは欠かすことができない。回覧板を回すという行為が、実は住民同士の対話のきっかけになっていたというのは確かにアナログな回覧板の良い面であるが、しかし共働き家庭の増加や生活リズムの変化により回覧板という仕組みが、むしろ高齢者家庭、若い世代双方にストレスを与える結果となってしまうと思う。しかし、この町内会活動のデジタル化支援事業は、情報の共有を確実に早めるという意味で、役員の負担軽減や町内会活動の透明性が向上している。</p> <p>この事業で特徴的なのは、Zoomの使用方法を中心とした実践的研修会である。これにより、市民に当事者意識の醸成を促すことができたのではないかと。「税金を払っているのだから、市民の困りごとは市が解決すべきだ」という意識を「市民が主役、市はサポート役」へと変えていく必要がある。</p> <p>ところで、デジタル化に移行していない町内会も存在し、特に高齢者層におけるデジタルツールの利用が進んでいない点は、今後の課題である。デジタル化</p>

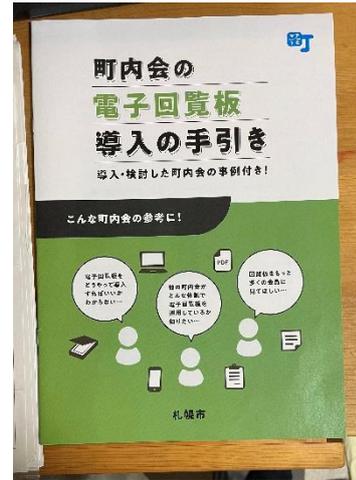
が進む一方で、地域コミュニティの伝統的な絆や対面でのコミュニケーションの価値も重要である。そのため、デジタルとアナログのバランスを保ちながら、町内会の活動を推進することが求められるだろう。

この視察から、札幌市における町内会のデジタル化は、本市にとっても参考になる取り組みであり、このようなデジタル化の取り組みを参考にしつつ、地域の特性を活かした町内会活動の強化を図ることが重要であると感じた。

視察の様子



札幌市役所前にて



札幌市発行の「電子回覧板の手引き」